



TITLE:

# 景氣理論に於けるシユピイトホフ とハイエク

AUTHOR(S):

尹, 行重

---

CITATION:

尹, 行重. 景氣理論に於けるシユピイトホフとハイエク. 經濟論叢 1935, 40(3): 627-636

ISSUE DATE:

1935-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130562>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第三參號

昭和十年三月一日發行

## 論 叢

鑛產稅附加稅の課稅權者……………法學博士 神戸正雄

預金の積極性と消極性……………經濟學博士 小島昌太郎

第三史觀の概念……………文學博士 米田庄太郎

## 時 論

交換貿易制より見たる吾國の貿易……………經濟學博士 谷口吉彦

## 研 究

ミロオの金なき國際交換決濟制<sub>に就いて</sub>……………經濟學士 松岡孝兒

貨幣の轉回速度の構想に就いて……………經濟學士 有井治

貨幣自體の限界效用……………法學士 正井敬次

## 說 苑

ウィリアム・ペティーの經濟說……………經濟學士 相澤秀一

支那のボイコットに就て……………經濟學士 黒松巖

景氣理論<sub>に於ける</sub> シュビイトホフとハイエク……………經濟學士 尹行重

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

# 景氣理論に於けるシュ ピイトホフとハイエク

尹 行 重

## 一

周知の如く、シュピイトホフの景氣理論の特質は、景氣現象の本質を間接消費財生産と營利資本形成との不調和に求め、而もかゝる不調和の根本原因を、主として間接消費財生産の側にありとする點にある。彼によれば、景氣上昇期は間接消費財生産擴張の段階であり、恐慌は補完財の欠乏による間接消費財の相對的過剩である。而して補完財の不足が（貨幣經濟なるが故に）

五一八〇頁。

36) 作田博士、滿蒙爭議の實相（經濟論叢第三十三卷第四號）六八一七八頁。  
同 博士、生産力より見たる日滿經濟關係（東亞經濟研究第十六卷第四號）  
一一七頁。

營利資本の欠乏として現はれる。所が他面に於て營利資本の形成は、上昇が末期に近づくにつれて緩慢となり、そのことが營利資本欠乏の現象を強化する。

ハイエクの景氣理論の特質は、創造信用による貨幣量の増加が一般物價水準に及ぼす影響を通してではなく、個々の財の相對的價格に及ぼす影響を通して、景氣變動を惹起すると見る點に存する。即ち個別價格の相對的比率の變化——從つて生産財と消費財との需要比率の變化——によつてのみ、景氣の動きを説明せんとする。

上に述べたやうな夫々の特徴により、シュピイトホフの景氣理論は部分的生産過剩説、ハイエクのそれは新しき貨幣的景氣理論と言はれよう。然し乍ら本稿に於ては、兩者の學說内容を紹介批評せんとするのではない。唯兩者の理論的脈絡乃至異同を明にしようと思ふ。それらの學說史的考察は別の機會に譲る。

## 二

景氣理論に於ける理論的出發點を、何處に置くべき

かは一の問題である。即その出發點を靜態に求むべきか、動態に求むべきか。シュピイトホフは景氣變動を與へられたる事實として、その自律的變動が如何にして行はるかを見る所の動的理論の立場をとり「正常的なるものは上昇でも沈滞でもなく、景氣循環の全過程そのものである」とする。所がハイエクは均衡狀態即景氣の變動なきものと假定せられた狀態から、如何にして景氣變動が成立し、而してそれが更に進行するかを究める。シュピイトホフは動態から出發するため所謂循環論法に陥る嫌はあるが、ハイエクは靜態から出發することによつて、かゝる難點は免れてゐると言へよう。然し乍ら前者は景氣循環の週期性と必然性を重要視するに反し、後者はこの點殆んど等閑に附してゐるやうに思はれる。

さて何れの狀態に理論的出發點を求めるにせよ、先づ検討すべきことは、貨幣價值乃至一般物價水準の問題である。言ふ迄もなく貨幣經濟に入るや、貨幣と云ふ新しき要因が介入することによつて始めて需給の自

- 1) Spiethoff. Art. Krisen, in Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl. 1925. S. 75. Spiethoff は次の如く財を分類してゐる、1 間接消費財、2 収益財(生産設備、利用設備)、3 消費財(直接消費財)
- 2) Spiethoff, a. a. O., S. 82.
- 3) Hayek, Preise u. Production, 1931. S. 34. 豐崎稔氏譯、貨幣と景氣變動、昭和九年 p. 70

動的攪亂が生じ得ると云ふことに就ては、原則的には兩者の見解が一致してゐる。然し乍ら貨幣價值に關しては、兩者の見解は全く對立してゐる。而もその事が重要な意義を有するのである。シュピイトホフは生産擴張と營利資本形成とが相平行する限り、貨幣量の増加を認め、而も貨幣價值が安定的でありうるとする。而して信用は、本位貨幣が數量の制限の爲に稀少性をもつ場合に「貨幣價值及その安定性を貨幣數量から獨立せしむる」<sup>4)</sup>所の貨幣代用手段の役割を有すると論じてゐる。然るにハイエクは貨幣價值乃至一般物價水準概念の有效性を否定することによつて、彼の理論體系を

特色あらしめんとした。彼によれば個々の財の相對的價格（或は價值）の變化のみが景氣を動かす。換言すれば景氣變動は財貨の交換比例の變化によりてのみ生ずる。「個々の價格に對する貨幣のすべての影響を、それが物價水準の變化を伴はうが伴ふまいが、それと全然無關係に研究して見ると、我々は直ちに物價水準の逆數價值である一般貨幣價值なる概念が甚だしく無益で

且不用のものであることを檢出し得る。<sup>5)</sup>即彼によれば一般物價水準が不變であつても個々の財價格の相對的比率は變化する場合があり、又一般物價水準が變動しても諸價格間の相對的比率は變化しない場合があり得る。故に一つの平均概念に過ぎざる所の一般物價水準の變動は如何なる景氣現象をも説明することが出來ず、從つて一般物價水準の逆數價值である所の一般貨幣價值といふ概念も無用のものであると云ふのである。

個別的價格の比率の變動のみが景氣を動かすと云ふハイエクの見解は正當であらうか。反面から云へば一般物價水準の概念は景氣變動の説明の中から全然排除すべきものであらうか。一般物價水準の變動が景氣變動の過程に於て何等かの能動的な影響を及ぼす事は否定すべからざる事實ではなからうか。若しハイエクの如く、個別的價格の相對的變動のみが景氣を動かすものとすれば例へば物價低落の傾向あるときと雖も消費財價格の低落が生産財價格の低落よりも重ければ、そこに、更に長期的なる迂回生産の轉化、從つて生産擴張が可能でなければならぬ。尙相對的比率のみが問題であるとすれば、資本財消費財の價格比例一〇〇對五〇から八〇對四〇に下落したとしても、二對一の比率が維持される以上、不景氣

4) Spiethoff, a. a. O. S. 74.

5) Hayek, a. a. O. S. 28; 豐崎氏譯 p. 61.

は起らない筈である。然しかゝる考へは客觀的事態に照らし  
て考へて餘りにも不合理である。所が一般物價水準の變化の  
みに景氣の變動を求めるのも全面的な見解ではない。景氣の  
動きを説明する場合に於て最も重要な意義を有するものは  
利潤の大きさである。此利潤の大きさは二つのものに依存する。  
一、個別價格關係に、二、一般物價の動きに（即各個別價格の  
同時的な動きに）。一般物價のみに着眼し又個別價格關係の  
みに着眼するのは何れもその一方に眼を閉づるものである。<sup>6)</sup>

かくてハイエクの理論は特に個別的價格の變動を強調する點  
に於ては、没しがたい功績をもつとしても、それだけで完全  
なる説明であるとは云はれ得ぬ。なほ、シュビイトホフも景  
氣の説明に於て「價格の變動より出發することは誤りである」<sup>7)</sup>  
と云へることを注目すべきである。

轉じて信用の問題を見よう。シュビイトホフは上昇の手段  
として信用に二つの機能を認める。信用によりて資本形成が  
遂行せられまた信用は貨幣代用手段として作用することから  
貨幣價值の上にある作用を及ぼす。まづ前者について考ふる  
に、信用は信用組織と株式組織との連絡を通じて、退職貨幣  
を吸収し、これを資本として作用させる。次に、後者につい  
て考へよう。本位貨幣の數量には一定の限度があり、それが  
稀少となれば不景氣を招く恐れある場合、信用は（貨幣數量と  
は無關係に）貨幣價值及其の安定性を維持することに役立つ  
のみならず、又生産擴張及物價騰貴をも可能にすると考へる。<sup>8)</sup>

所がハイエクは信用の創造による貨幣量の増加が、個別的財  
の需要の比率と生産の比率との不均衡をもたらず點に景氣變  
動の原因を求めた。創造信用による新なる資本形成は資本構  
成の割合を變化せしめ、これによつて生産構成と資本構成と  
の間の不均衡をもたらずといふのである。かくてハイエクに  
於ては創造信用は決定的に重要な意義を有する。

ハイエクは、すべての非貨幣的景氣理論に於ては、生産財  
の生産に相應して「信用の新しき創造を暗黙裡に假定」してゐ  
ることを指摘し、それこそ正に説明を要すべき點にして、嚴  
密な意味に於て理論的説明の出發點たり得ないと論じてゐる  
が、恐らくこの非難は當らないであらう。この事は心理的景  
氣理論にも同様に言はれるであらう。要するにシュビイトホ  
フは信用をば上昇の一つの手段として考へ、ハイエクは景氣  
變動の根本原因として考へる。

次には利子に關して。シュビイトホフは景氣上昇の經濟的  
條件として「固定的設備より生ずる利得と貸付利子との間に  
明瞭なる開き」<sup>10)</sup>即利潤の見込の確實なることを擧げてゐる。  
従つて貸付利子率の變動は利潤と密接なる關係を有すること  
勿論である。然し乍らハイエクに於ては均衡利子と貸付利子  
との開きが景氣を動かすと云ふ。周知の如く此の見解は根本  
的にはベエム、ガイクセル、ミイゼス等の流れを汲んでゐる。  
即節約部分と新なる資本需要とが一致する限り、均衡利子と  
貸付利子とは一致する。均衡狀態に於ては生産財價格と生産

6) 高田博士、ハイエクの景氣理論。經濟學論集第四卷第五號 pp. 59-60.

7) Spiethoff, a. a. O. S. 62.

8) Spiethoff, a. a. O. S. 74.

9) Hayek, Geldtheorie u. Konjunkturtheorie, 1929. S. 45.

10) Spiethoff, a. a. O., S. 70.

物價格との開きが正しく、利子の高さに一致しなければなら  
ないのである。<sup>11)</sup> それ故に兩者は根本的には同一事象——利子  
率の變動による景氣の上昇——を異つた表現で現はしてゐる  
に過ぎざるも、概念的把握に於て、ハイエックの方が著しく明  
確であることは認めねばならない。然らば均衡利子と貨幣利  
子——利得と利子——との開きは如何にして生ずるか。シュ  
ビイトホフはこれを内生的原因——沈滞期に於ける時間の經  
過に伴ふ經濟自體の諸條件の變化<sup>12)</sup>——に求めた。所がハイエ  
ックは彼が新なる創造信用を景氣變動の原因と見る限り、從來  
の貨幣的景氣理論と同様外生的原因に之れを求めたと見るべ  
きであらう。然し他方彼は均衡利子と貨幣利子との開きは内  
生的にも生じ得ると云ふ。この場合は銀行の獨自的な資本調  
節を假定してゐる。<sup>13)</sup>

而してハイエックは特に利子の機能を強調する。彼はシュビ  
イトホフの營利資本の形成と間接消費財生産との不一致、そ  
れに伴ふ均衡の擾亂と云ふ見解は利子の機能を考慮する限り  
否定するべきものであると見る。即ちシュビイトホフが、利  
子の生産領域に於ける調節者としての機能を無視し、生産と  
營利資本形成とを相平行させるためには、夫々兩者の事情を  
十分認識して相互適應せしめねばならぬ、と説くのは一つの  
遁辭であると云ふ。<sup>14)</sup> ハイエックは此點について次の如くに考へ  
るのがある。自發節約のみが行はるゝ場合、節約が資本の需

要をみたさざるときには、貸付利子の騰貴が生産擴張を制限  
し、反對の場合は利子の低落が生産擴張を促進せしむること  
によつて、節約と投資とは調和を保つであらう。茲に於てシ  
ュビイトホフが彼の景氣理論に於て利子の機能を輕視してゐ  
る點を指摘したのは全く正しい。然し乍ら貸付利子はその  
變動の遅れの故に景氣變動に於て重要な役割をなすのであ  
る。所がハイエックは所謂生産領域の調節者としての利子の機  
能を強調しながら、その調節過程そのものが資本主義經濟  
組織の下に於ては景氣變動の過程そのものであることを理解  
してゐない。尙亦彼はシュビイトホフの批評に關する限り、  
均衡利子を一定なものとして前提してゐる様であるが、均衡  
利子自體は動態に於ては生産と價格との事情によりて變動し  
得ることは自明であり、従つてかゝる前提は不當であると言  
はねばならぬ。<sup>15)</sup> 而も彼自身の理論的構成に於ても、利子の機  
能が全面的に作用してゐない。若し、生産信用の授與に際し  
て均衡利子に比し貸付利子が低下せしめられたとすれば、生  
産手段生産部門のみならず、消費財生産部門も生産の擴張を  
なすであらう。かくて需要増大のため、すべての生産部門の  
生産財價格は騰貴すると同時に均衡利子率も下落するであら  
う。従つてすべての生産部門は一定限度以上に其生産を擴張  
すること、不可能となるに至るであらう。然るに彼は生産信  
用の増加は消費財生産部門とは無關係に生産財生産部門にの  
み影響を及ぼすと假定してゐる。従つて生産領域一般に對す

11) (a.), Hayek, Geldtheorie, S. 127. (b.) Hayek, Preise, SS. 81-82.; 豐崎氏譯 p. 133.  
12) Spiethoff, a. a. O., SS. 71-72.  
13) Hayek, Geldtheorie, S. 78.  
14) Hayek, Geldtheorie, S. 36 ff.  
15) Hayek, Preise, S. 82.; 豐崎氏譯 p. 136.

る調節者としての利子の機能は、先づ生産財生産部門にのみ作用することを認めることになるが、之は明かに背理である。こゝに於て彼のシュビイトホフに對する批評は別な意味で自説の矛盾を告白したものと見られるであらう。

## 三

最後に營利資本の欠乏と生産過剰とに關する兩者の見解を明かにしよう。シュビイトホフに於ては資本欠乏乃至生産過剰の原因を間接消費財生産と營利資本形成との不調和に求める。<sup>16)</sup>「高景氣の時には間接消費財を購入すべき營利資本が非常に大なる爲、間接消費財が不足又は欠乏してゐるものとして示される。資本欠乏の上昇の最後の段階に於てはその割合が逆になり、而して供給すべき間接消費財が需要する營利資本を凌駕する。そこで生産過剰が勃發する。<sup>17)</sup>然らば間接消費財と營利資本との不調和は如何にして生ずるか。彼によれば間接消費財及収益財は複雑なる資本關係に蔽はれてゐる。そしてこの複雑なる資本關係の闡明は生産過剰の發生を解く「鍵」を形成する。而してかゝる資本關係の構成は、一、間接消費財の生産、二、營利資本

(貯蓄)の形成、三、營利資本による間接消費財の購買等の三つの事象よりなり、これらの間に一定の均衡と相互の適應があつてこそ始めて國民經濟の健全な發展がある。然るに、資本家的經濟組織の下に於ては、資本家と企業家とが對立して相互の事情を認識し得ない。そこでかゝる適應の完全なる成立は不可能であり、従つて不均衡が必然に生ずる。而もその不均衡をもたらす原因は「主として間接消費財の側に存するが、營利資本も亦それに關係を有する。<sup>18)</sup>かくて間接消費財側に於ける原因としては先づ「需要と生産との間の比較的長い時間的距離」<sup>19)</sup>が挙げられるが、根本的なものは「全體としての財貨の世界の内部に於ける數量的不均衡」<sup>20)</sup>であると云ふ。即生産技術の變化と共に資本の有機的構成が高級化し、生産設備の完成及存續期間が長期化する。かくて生産期間の長期化は將來に於ける需要と供給との適應關係を見失はしめ、當面の生産擴張を刺激し間接消費財が新しき間接消費財の生産設備に充用される様になると、その需要は増大するにも拘

16) 消費財價格の騰貴は資本の消耗を意味するから消費財による景氣上昇はありえないと彼は見る。

17) Spiethoff, a. a. O., S. 76.

18) Spiethoff, a. a. O., S. 76.

19) Spiethoff, a. a. O., S. 77.

20) Spiethoff, a. a. O., S. 78.



はらず供給は之に伴はない。所が新しき生産設備が漸次完成されると、間接消費財生産の著しき増加と其需要の減少とにより、それが過剰の現象を呈する。然し乍らシュビイトホフによればかゝる現象は根本的には間接消費財に對する補完財が不足してゐる事を意味する。即ち収益財の擴張は單に間接消費財のみでは不可能であり、その補完財たる勞働力及その生活資料たる種々の享樂財が必要である。然るに必要である勞働力及享樂財が欠乏してゐる。この事は相對的に間接消費財の生産過剰としてあらはれる。同時に彼は間接消費財自體の相互の補完關係の不均衡をも考慮してはゐるが、それを前者程重要視してはゐない。<sup>21)</sup> 然らば數量的不均衡が何故に營利資本の欠乏として現はれるのであるか。彼によれば貨幣經濟に於ては財貨は本來決して相互的に直接關係を持つのではなく寧ろ貨幣の媒介によりてのみ關係をもつ。貨幣經濟に於て、或種の財の欠乏が意識せらるるのは、他の種の財の過剰に於てではなく、寧ろ貨幣的購買力の不足として現はれる補

完財の不足に於てである。過剰に生産された財は間接消費財であるから、過剰は營利資本の欠乏と對立する。<sup>22)</sup>

今この過程を營利資本形成の側から見れば、生産設備への過剰投資による物價低落の傾向と、勞銀の騰貴とは、營利資本形成を緩慢ならしめ、資本欠乏を激化せしめる原因となる。然し乍ら此營利資本の欠乏は貨幣の創造によりて補充されない。蓋しそれは「貨幣の形態に於ては寧ろ生産過剰に見える財に對する補完財の形態で供給されねばならないから」<sup>23)</sup>。

社會に於ける勞働力の<sup>24)</sup> 大きさは一定の限界を有するが故に、間接消費財生産擴張が或程度迄進行すれば勞働力の不足を生じ、その事が貨幣經濟なるが故に營利資本の欠乏として現はれる。然らば何故に勞働力の不足が營利資本の欠乏として現はれるのであるか。眞相は次の如しと思ふ。

個々の企業家が生産を擴張するための生産手段購買に際して、固定設備材料と勞働力との一定の割合を無

21) Spiethoff, a. a. O., SS. 77-78.

22) Spiethoff, o. a. O., S. 81

23) Spiethoff, a. a. O., S. 78.

24) シュビイトホフによれば勞働者の生活資料たる享樂財は主として耐久性乏しく短期間に代替され得るが故に直に需要に適應すると考へる。それ故に補完財とは根本的には勞働力を意味するものと思はれる。

視して、固定設備材料を格別に多く買入れる。所が社會の勞働力は一定してゐる。故に一定の割合以上に生産を擴張せんとするも、勞働力がそれに伴はず、不足を生ずる。このことは生産構成からみて、一定の割合に於て投下せらるべき營利資本が固定設備材料の生産の爲に過剰に投下されたことを意味する。故に勞働力の欠乏は營利資本の勞働力購入部分の相對的不足と照應することになる。かくて勞働力の不足が營利資本欠乏の外觀を呈する。即ち若し生産事情をよく認識して投資したとすれば部分的過剰投下が生じない筈であるのに、然らざるがため勞働力不足を生じ、それに照應して營利資本が欠乏の姿を呈する。これ複雑なる資本關係に蔽はれて居る數量的不均衡の正體である。然るにかくの如き資本欠乏の現象は、勞銀の騰貴及物價低落の傾向による資本形成の緩慢化と、一度生産設備に投下したる過剰資本は補完財需要に割當てることが出来ないと言ふ事情とによつて、激化されるのである。勿論かゝる考へ方の當否は別に批評されねばならぬ。

ハイエクに於ては消費財と生産手段との需要の比率變化と、消費財と生産手段との生産の比率變化との釣合如何が問題である。彼によれば自發的節約の場合には消費財と生産手段との需要の相對的比率が一度變化したる以上持續的に存續する筈である。蓋し節約者が節約による新しき投資により所得が増加しても、全經濟主體が全貨幣收入の今迄の様な消費目的と生産とへの分配率を改める動機はないからである。然るに強制的節約の場合は消費者需要が企業者側からの生産財需要と對立して、其相對的な大きさを減ずるが爲に、消費を制限せざるを得なくなるのである。然もこの制限は消費者が有意的に、更に少く消費することではなく、唯貨幣所得が變化せざるにも拘はらず、財貨が少ししか得られない事から起る。<sup>25)</sup> かくて一應生産手段の需要は消費財の需要よりも相對的に増加し生産迂回期間は長期化する。然し乍ら「消費財貨の價格が變化せず又少くとも下落しない場合には必然的に企業家の競争を惹起し、原始的生産要素の價格を騰貴せしめ」<sup>26)</sup>その結

25) Hayek, Preise, S. 56; 豐崎氏譯 p. 97.

26) Hayek, ibid; 同氏譯, p. 98.

果所得増加し消費財需要は増加する。他方生産迂回の長期化のため、生産力が生産財生産に吸収され、消費財生産は減少して居る筈である。これらの事情は消費財の価格を益々騰貴せしめ、其結果、生産迂回期間を短縮化する。若し生産信用が消費財需要増加率に相應して増加し得るならば、生産の短縮化は行はれない筈である。<sup>27)</sup>然るに創造による信用授與は無限に行はれない。そこで資本欠乏を生ずる。

それ故に消費財の価格とそのすぐ前段階の生産物の価格との開きが、高き生産段階の生産物の價格相互の開きよりも大となる。非特殊的生産手段<sup>28)</sup>は低き生産段階に流れ込み、高度の段階に於ては補完財の不足の結果相對的過剩を來し、そのため其生産物價格は低落し、生産は不利となる。然るに非特殊的生産手段の總量は、之を使用すべき短期の生産行程が未だ急には完成せられ得ぬ爲に、即時的には吸収されないと云ふ。<sup>29)</sup>

上述の如く何れの見解も消費財の價格が騰貴すれば恐慌を伴ふと言ふ點に於て、結論的には同一である。

けれども、シュビイトホフに於ては間接消費財生産と營利資本形成との平行關係如何が問題であり、而も恐慌の根本的な原因を間接消費材の過大なる生産そのものに求めてゐるが、ハイエックに於ては消費財及生産手段の需要比率と、その生産比率との比較が問題であり、景氣のくづる原因を信用擴張の限界に到達したるが爲の資本欠乏之による生産財生産の行きつまりに求めてゐる。

ハイエックは、彼の見解がシュビイトホフの學說と可成一致することを認め、次の如くにのべてゐる。「彼（シュビイトホフ）が恐慌を惹起する原因とせる資本欠乏は全體としての財貨の世界の内部に於ける數量的不均衡として現はれ、恐慌の説明は全く簡單に流通する資本の缺乏が恐慌を招來するのであると總括されてゐる。シュビイトホフとの一致は特に次の點にある。『生産行程の長さが幾何でも變動すると欠乏と過剩が同時に惹起せられる。過剩となるものは、生産方法が變化するや、最早従前と同じ量だけ使用され得ない財であ

27) Hayek, Preise, S. 96.; 豐崎氏譯 p. 152.  
28) Hayek, Preise, S. 71.; 豐崎氏譯 p. 118.  
ハイエックは生産手段を次の如く分類してゐる  
特殊的生産手段——例へば機械  
非特殊的生産手段——例へば勞働力  
29) Hayek, Preise, S. 87 ff; 豐崎氏譯 p. 141. 以下

り、欠乏するのは補完財である。<sup>30)</sup>ところが、シュンピットホフに於ては恐慌をもたらす究極的原因是『全體としての財貨の世界の内部に於ける數量的不均衡』であり、これが『資本欠乏』の現象として顯はれるのであるが、その説明の爲には、高景氣の末期に於ける資本形成の緩慢が高調せられ、營利資本の蓄積と蓄積せられたるものの用途分配が重視せられてゐる。然るに、ハイエクに於ては、此點が決定的なるものではない、信用創造の限度に達すること、そのことが景氣の行詰りに於て最も重要な事である。かくてハイエクの所謂一致すべき筈の恐慌原因論が重要な點に於て相分れてゐることを指摘せねばならぬであらう。尙ハイエクは、シュンピットホフとの一致點が『欠乏と過剰との同時性』にあると云ふ。然し乍らかゝる意味の一致點は從來の多くの財的景氣理論に對しても形式的には同様に認めらるるものといひうるであらう。問題はその内容如何である。シュンピットホフに於ては主として間接消費財に對する補完財の不足である。即勞働力及享樂財の不足である。これが貨幣經濟なるがために營利

資本の欠乏の形となつて現はれる。然るにハイエクの場合は恐慌は資本欠乏のため、生産手段生産部門に於ける特殊生産手段の過剰と非特殊生産手段の欠乏、他方に於ては消費財生産部門に於ける特殊生産手段の不足と非特殊生産手段の過剰の形をとつて現はれる。かくてシュンピットホフに於ては社會全體から見れば、補完財(勞働力等)の絶對的不足であるが、ハイエクの場合は、失業をすら伴ふところの補完財の偏在である。故に『欠乏と過剰との同時性』なるものも、兩者に於ては全く異つた内容を有するのである。

如上の見解に徴すれば、シュンピットホフの理論は大體資本主義發達の中期迄の經濟的狀態を説明し、ハイエクの理論は世界大戰後の經濟的實情に着眼してゐるものと言つても過言ではないであらう。尙亦シュンピットホフの「時間的要素」と「節約」との概念に相應して、ハイエクの「迂回生産期間」と「自發的節約及強制的節約」との關係、國民經濟の世界經濟との關係、恐慌の必然性、滯貨其他に對して、兩者の見解を吟味すべきであるが、今は立入らない。(一九三四、一一、二五日)

30) Hayek, Preise, S. 91.; 豐崎氏譯 P. 147.